
守るべきものは

清南劉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守るべきものは

【Nコード】

N9738K

【作者名】

清南劉

【あらすじ】

ギルド メルアヘル は暗殺を主に活動するギルドである。
ある昼時、このギルドに美しい少女がやってきた。

ただでさえ暗殺に関係のなさそうな彼女だけど……。

恋と憎しみとが交差するファンタジー。

……になる予定

少女現る

微かな悲鳴を聞き、青年は足を止めた。悲鳴の聞こえた屋敷に一旦目を向けたが、すぐ森へと歩みを進めた。そしてまもなくして暗闇の中へと溶け込むように去っていった。

[illegible]

バンツ！

扉が勢いよく開かれた。室内にいたものたちは何事かと一斉に扉の方を見た。皆の見たものは少女だった。聖なる力が宿っているかのように思えるほど美しい銀の髪、澄みきつた空を連想させる水色の瞳、そして透き通る雪のような肌。どこか人間離れした美しさを持つ少女だった。

「こっちはギルド【メルアヘル】だな」

暫くの沈黙を破ったのは少女だった。

「……だとしたら？」

人を掻き分けていかにも大人という感じの女性が出てきた。

「依頼がある・・・」

女性の紅い瞳がしばし少女を観察した。

「お譲ちゃん、名前は？」

「・・・ミーズ」

少女、ミーズは澁々といった感じで答えた。

「わたしはミランダ」

「……っで？このギルドがどういう依頼を主に受け取っているかを知っての依頼？」

ひとつ深呼吸をし、ミーズはミランダの目を見て言った。

「ええ

「・・・ルカシスという男の殺害を依頼する」

若干声の上擦ったような気がしなくてもないがミーズの瞳は決意にいろどられていた。

「そう・・・」

決意は固いようね」

ミーズは相槌を打ち口を開いた。

「それと私もその依頼に携わりたい」

急にその場の空気が変わった。

「・・・お譲ちゃん、わたしたちは自らこの職業に就こうとして就いたんじゃない。」

みんな何かしらの理由があって人殺しの職に就いたんだ。」

ミランダは怒りを抑えたような口調で言った。

「それはしたくて人殺しをしていないと？自らの職業に誇りがな
いと言ってるんですか？」

ミーズは無表情で聞いた。

「違うよ！それでも、いや、だからこそ誇りがあるから人殺しを
したこのない奴には人殺しをして 欲しくないんだよ！」

ミランダは目を吊り上げて怒鳴った。

それに対しミーズは目を伏せた。

「それは・・・ごめんなさい」

それまで尊大な態度の彼女から謝罪が出るとは思わず周囲のみんなは一瞬動きが止まった。

「けれど、何故私が入殺しをしたことがないと？」

彼女は本当に不思議そうに問うた。

今度は別の意味でみんなの動きが停止した。

そして、一斉にこの無垢そうな少女を見た。

「・・・譲ちゃん入殺しを？」

ミーズは小さく、でも確実に頭を縦に振った。

少女現る（後書き）

初投稿です><

変なところ改善すべきところがあったら指摘お願いします

鍵人

キーツ

「なんだあ？静だなあ・・・なんかあったのかあ？」

扉の開く音と共にその場の空気にふさわしくない間抜けな声がした。

「レオン！」

10才前後の少女が笑顔でレオンと呼ばれた青年に抱きついた。

「やあやあ、小さなレディ僕が留守の間浮気はしてなかったかい？」

青年は少女に微笑みかけながら言った。

「当たり前でしょ！・・・セイラを疑うの？」

セイラは怒ったかと思うと、泣きそうな顔になったので青年はうるたえ、言い訳をしていた。

数年ぶりに見るので多少変わったところはあったが、ミーズは青年を知っていた。

「・・・レオナルド？」

自分の名前を呼ばれてはじめてミーズのことを見た。
その目は驚愕に睜られていた。

「ミーズ様・・・」

彼が自分をそう呼ぶのを聞き、ミーズはレオナルドの喉元に独特の形をした剣を突き出した。

「ルカシスはどこだ！」

ミーズはすごい剣幕でレオナルドに畳み掛けた。

「おまえなら知っているはずだ！」

レオナルドは顔を歪まして彼女を見返した。

「知りません・・・」

「嘘だ！お前が知らないはずがないだろう！」

しかし、レオナルドの瞳に全く曇りのないことを認めるとミーズ

は膝をついた。

それをレオナルドは痛々しいものを見るかのように見つめた。

「・・・ミーズ様、まさか屋敷を出たのはル力を探すため？」

「そうよ・・・」

小さな声で俯きながら彼女は答えた。

そして、勢いよく顔をあげた。

「そうよ！当り前でしょ！」

強く言い直した彼女の瞳には軽く涙が生じていた。

「^{はは}継母を殺したのよ！きつと、一年前父を殺したのも彼なんだわ
！」

それを言った途端、ミーズは寒気を感じた。

レオナルドが殺気を露にしたのである。

「・・・ミーズ様、事情も知らず勝手な憶測でル力を疑わないで
下さい」

彼は氷のように静にそして冷たく言い放った。

ギルドの者は目を丸くした。

レオナルドが女性を叱るならまだしも、女性に対して殺気をだしたからだ。

「っ！なら、その事情とやらを教えてよ！そうしたら私だってこんな疑い掛けないわ！」

レオナルドの殺気に気圧されたものの、なんとか彼に言い返した。
この言葉は、彼女が予想した以上に彼を狼狽させた。

「どうしたの？なんで黙ってるの？」

「それは・・・」

彼はなおも答えない。

「ほら、何も言えないじゃない？それでルカシスを疑うなってどうかしてる・・・」

ルカシス・フェンレイジーはフェンレイジー夫人殺害事件の夜から行方知れずなのだ。

「察してください、これはあなたを・・・」

そこでレオナルドは自らの口を塞いだ。

ミーズもその言葉を、鍵となりそうな言葉を聞き逃さなかった。

「わたし？わたしが関係してるの？」

「聞かないに越したことがないこともあるのですよ」

鍵人（後書き）

まだ進歩は見られませんが
これから精進していくつもりです><

ギルドに入る

レオナルドの窮地を救ったのはいつのまにかミーズの後ろに立っていた老人だった。

「・・・マスター」

ミーズが老人が誰かと聞く前にセイラが呟いた。

「ミーズさんとやら、あまり彼を追い詰めなさんな」

好々爺然とした老人に見えるのに、隙が全くない。

「わしはこのギルドマスターのホヌヌジフじゃ」

ギルドマスターそれは即「コンティニユル」の十人会に認められたものである証でもある。

【コンティニユル】とはこの世界、ナヴィスの最高機関である。

この中には、最も権限の大きい十人会をはじめ、聖職者^{ヒーラー}、領城主^{フエン}などの役職がある。

十人会に認められるものは一度に50人前後であり、その個人個人が何かに秀でたものがある。

そしてその何かを中心とたてギルドを設立するものが多い。

「暗殺ギルドのマスターとは・・・」

かなりの手練だとお見受けした」

「もうわしはだめじゃよ、年でねえ」

しかし、そんな様子は微塵もない。

今もなお、現役で行けそうだ。

「・・・それで？」

何故私を止める？」

ミーズは不機嫌そうに言った。

「それはな彼はホントに何も知らん

たぶん表面上の話しか聞いておらんと思うぞ」

ホヌヌジフは言う。

しかし、そんなにミーズが納得できるわけもない。

「ならなんでレオナルドはそんなにうろたえているんだ！」

「・・・それはなあ、その表面上の話でさえそなたを傷つけることになる

おそらく、お主は耐えられるまい」

ミーズは心底侵害だという顔をした。

「私にそんな覚悟もないと言いになるのですか？」

「いや、お主はたぶん根本的な大きな勘違いをしているはずじゃ
覚悟をする対象が違いすぎる」

彼は首を振りながら言った。

「・・・何故、そんなに知っているのですか？」

「読心術じゃよ」

すまないがお二人の心の中を覗かしてもらった」

ミーズはさらに気分を害したようで、怒りがありありと顔に表れていた。

「それで？私は覚悟が来ているその表面上の話とやらだけでも
してもらおうか？」

ホヌヌジフはちょっと困った顔をした。

「そうじゃのう・・・」

じゃあ暫くわがギルドで仕事をしてくれ

そうして覚悟がついたと思ったら教えてやろう」

ミーズは不意ながらその条件を飲むことにした。

「私が依頼に参加していいかという件は？」

これだけは譲れないというように聞いた。

「強情じゃのういいだろう」

ホヌヌジフは根負けしたようで呆れたようにミーズを見た。

「そうか」

では暫くここにおいてもらうぞ」

そう言つと彼女は喜々としてギルドから出て行った。

ギルドに入る（後書き）

すみせんこちらの話はちょっと一端書くの止めますくく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9738k/>

守るべきものは

2011年1月20日16時56分発行